

仲間とのかかわりのなかで、自己を見つめ、自ら動き出す子どもを求めて — 3年生「軒先マーケット」の実践 —

杉山 也寸史* 中野 真志**

*附属岡崎小学校

**生活科教育講座

Seeking Children Who Start on Their own Initiative through Looking at the Self in the Context of Peer Involvement: Practice of 'Nokisaki Market' in the Third Grade

Yasushi SUGIYAMA* and Shinji NAKANO**

*Okazaki Primary School Affiliated to Aichi University of Education, Okazaki 444-0072, Japan

**Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords : 問題解決学習 非認知的能力 くすのき学習

I くすのき学習で求める子どもの姿

本校では、生活科と総合的な学習の時間を「くすのき学習」とよび、対象への思いや願いを実現させようとする子どもたちの主体的な活動を中心に学習を進めていく。そこで、くすのき学習で求めていく子どもの姿を次のように設定した。

仲間とのかかわりのなかで、自己を見つめ、自ら動き出す子ども

II 求める子どもの姿に迫るために

くすのき学習で求める子どもの姿に迫るためには、教科・領域特有の資質・能力と非認知的能力が高まる必要があると考えた。

1 教科・領域特有の資質・能力について

本校では、問題解決学習で育まれる教科・領域の学びに関する資質・能力を「教科・領域特有の資質・能力」としている。くすのき学習で高めたい教科・領域特有の資質・能力は以下のような資質・能力である。

○「仲間を理解しようとする力」

仲間の対象へのかかわり方に目を向けて、かかわり方の背景を理解しようとする力。

○「自分を見つめ直す力」

仲間の対象へのかかわり方を理解した上で、自分の対象へのかかわり方を見つめ直す力。

○「自己決定する力」

自分と仲間との対象へのかかわり方の違いや、大事にしている視点のずれから、どうするのがよいのかと迷い、悩んだときに葛藤が生じる。その葛藤の末に、よりよい活動の方法や方向性を判断し、思いや願いの実現に向けて行動していく力。

なお、くすのき学習で用いている用語について、以下のように定義している。

対象

活動のなかで中心的に扱う教材（人・もの・こと）

ひたり込む

対象への愛着を感じたり、自分事として感じたりしながら、切実感をもって対象にかかわること

思いや願い

子どもの「こうしたい」「～になってほしい」「やらなくては」という活動を支える原動力となるもの

2 非認知的能力について

本校では、自信や粘り強さ、コミュニケーション力のように、人間性に関する部分を

「非認知的能力」として整理し、それぞれの力が、互いに高め合ったり、一方が他方に影響したりするといった関係性を踏まえた上で、目の前の子どもの姿をとらえている。

3 非認知的能力の視点で子どもをとらえる

非認知的能力が表出したり、はたらいたりする場面は、一人一人の子どもや教材によって違ってくる。しかし、これまでの研究の過程で、活動の停滞が見られた場面や、自分の活動に価値を見出した場面で、非認知的能力がはたらいて教科・領域特有の資質・能力が高まったり、非認知的能力の高まりを実感したりしやすいことがわかった。そこで、高まりを実感しやすい場面を見通した上で、非認知的能力の視点で子どもをとらえ、非認知的能力がはたらいて教科・領域特有の資質・能力を高められるように、適切なタイミングで教師支援を講じるようにした。

4 問題解決学習を展開するなかで、子どもをとらえて教師支援を講じる

生活に生きてはたらく力を養うため、子ども自らが問題を見だし解決していく問題解決学習を展開する。子どもたちは、対象に出会い、活動にひたり込むなかで、思いや願いを高めていく。そして、思いや願いを実現しようと活動を進めていく。その過程で、子どもを非認知的能力の視点からとらえ、それがはたらくように、次の教師支援を講じた。

(1) 朱記と対話を行う

子どもの活動の記録や振り返りに朱書きをする。この朱記によって、子どもの気づきを意識づけたり、活動の方向を目覚めさせたりする。また、教師と子どもが話し合う対話によって、子どもの考えをはっきりさせたり、真意を探ったりする。そして、子どもの考えを認めたり、甘さを指摘したりしていく。このようにして考えをゆさぶったり、支えたりしながら、子どもの活動を支えていく。

(2) かかわり合いを設定する

活動を進めるなかで、活動に停滞が見られ

たり、仲間の考えに意識が向いたりしたときに、これまでの活動で得た考えを学級全体で出し合い、吟味するかかわり合いを設定する。かかわり合いを設定することで、仲間の対象のかかわり方の違いに気づき、自分の対象へのかかわり方のよさや足りなさに目が向き、自分の対象へのかかわり方を見直していく。そして、葛藤の末に活動の方向性を自己決定し、改めて活動の見直しをもったり、新たな視点を得て活動を進めたりしていく。

Ⅲ くすのき学習での問題解決学習の展開

「Ⅱ 求める子どもの姿に迫るために」を踏まえ、問題解決学習を次のように展開した。

1 思いや願いをもつ

子どもたちは、対象と出会ったとき、対象と自分の生活経験を結びつけながら、思いや願いをもつようになる。対象と繰り返しかわるなかで、対象にひたり込むようになり、仲間の考えに共感したり、ずれを感じたりしながら思いや願いを明確にしていく。

2 活動を見直す

思いや願いを確かめ合った子どもたちは、自分らしさを発揮しながら活動を進める。そのため、思いや願いは同じであっても一人一人の対象へのかかわり方は異なり、活動の方法や方向性にも違いが生じてくる。仲間との活動の方法や方向性の違いに気づき、どうすべきか悩んだり、自分の活動に安易に満足して活動が停滞してしまったりすることがある。このようなとき、教師は、子どもの姿からどのような非認知的能力がはたらいているのか、どのような非認知的能力の高まりが見通せるのかをとらえ、子どもの考えを支えたり、ゆさぶったりする対話をしていく。そして、教師は、活動を見直すかかわり合いを設定し、子どもたちが自分の考えを語り合えるようにする。かかわり合いのなかで、仲間の対象へのかかわり方を知り、これまでなかった視点に気づいたり、自分のかかわり方と比

べたりすることで、改めて対象へのかかわり方を見つめ直す。そして、思いや願いに立ち返りながら葛藤の末に、活動の方向性を自己決定して活動を進めていくのである。

3 活動を振り返る

仲間とともに活動をやり遂げたとき、子どもたちは何物にも代えがたい達成感を味わう。このタイミングで、教師は、活動を振り返る時間を設定する。子どもたちは、仲間とともに思いや願いを実現できたことによる満足感を得ながら、教科・領域特有の資質・能力や非認知的能力の高まりとともに、自分が成長した理由や過程、場面をはっきりさせながら成長を実感していくのである。

以上のように問題解決学習を展開するなかで、非認知的能力の視点で子どもをとらえ、非認知的能力がはたらくように教師支援を講じたことが、教科・領域特有の資質・能力と非認知的能力の高まりや、自分の成長を実感できるのか、本実践を通して検証した。

IV 単元の構想

1 良樹をとらえ、願いをかける

学校生活の様々な場面で、良樹が自分の考えややり方を素直に出しているところを見かけた。1学期実践「喜劇」でも、台本をもらったとき即興的に腰を曲げて声色を変えながらおじいさん役を演じて、物怖じしない様子も見られた。授業ではよく自分の考えを発表し、つぶやきも見られた。そんな良樹の姿には、どういった背景があるのかをとらえた。

4月、学級代表に立候補したが、選ばれなかった。休み時間にわざわざ担任のところまで来て、「初めて代表になれなかった。なんで選ばれなかったのか」と言いに来た良樹。終業式の学年代表として話したり、実行委員に選ばれたり、これまでの経験からなのか、自分が選ばれなかったことに納得いかない様子であった。

(4月10日 教師メモ)

今までの経験値からすれば、自分にアドバンテージがあると思っていたのか、選ばれな

かったことに納得がいかない様子が見られた。「どうして学級代表になりたいって思ったの？」と聞いたところ、「みんなの前に立って言うのは慣れているし、自分の思ったことを言えるから」と答えた。良樹は、自分の思ったことを表現することによさを感じていることがわかった。また、懇談会で母親から、これまで多くの成功体験をさせるように意識してきたことを聞き、良樹は自分自身の考えに自信をもっていることが見えてきた。

ぼくは、まずさいゆうせんしたいのは、19ページの「えほんでみたほうがはやい」というアドバイスがイラッとしました。でも、ぼくのえんじているおじいさんは、とくにマイナスのいけんがなかった。(6月30日 学習記録)

1学期実践で全校に劇を見せる前に、まずは同学年の3年生に見てもらって感想を求めた。劇を見た3年生の感想のなかで、良樹は「さいゆうせん」したいこととして否定的な意見に対して強く反応し、「イラッ」と感情を露わにして納得していなかった。自分たちがやってきたことを認められなかったことが納得いかなかったのだろう。「でも」、自分のことについては「マイナス」がなかったと安堵する様子も見られた。良樹は、自分自身がまわりから認められているかどうかという意識が強いように感じる。そして、どう思われているのかという視点で判断していることが見えてきた。1学期の良樹を思い出してみると、教師の方に視線をよく送る姿が思い浮かんだ。素直に見えて、まわりからどう思われているかということが、良樹の判断に強く影響していることが見えてきた。

静香38 私はおもしろくなくなったから直したいことで、私は1場面のナレーターなんだけど、良樹君の声が小さくなっちゃってて、振り返りにも書いて。

良樹39 えー。

静香40 先生にも対話で言ったんだけど、良樹君の声が小さくなっちゃってて、上手にできたところに「おじいさんのリアクションができてい」って書いてあ

るけれど、それはあんまりできていないけれど。

良樹41 えー。

(6月22日 活動を見直すかかわり合い授業記録)

喜劇で、場面ごとに演じてお互いに思ったことを伝え合ったとき、良樹は、リアクションができていてよかったと考えていた。しかし、見ている人の視点から考えていた静香は、動きを取り入れたことで声が小さくなってしまっていることに気づき、おもしろさが伝わっていないと良樹に主張した。そのことばを聞いていた良樹は、「えー」と何度もつぶやき、先程までの勢いがなくなっていく様子が見られた。その後、別の仲間から称賛される意見もあったが、あまり反応はよくなかった。その後の練習では、同じ場面の仲間と話し合う場が設けられていたが、特に自己主張する姿は見られず、指摘を受けたことをそのまま受け入れて動きを変えていた。

自分の考えをもっている良樹は、仲間とかかわるときには自ら行動に移すことができる。しかし、まわりからどう思われているかという意識が強いために、なるべく衝突を避けながら安易に同調していくことが見えてきた。それは、相手の考えと自分の考えを比べて、自分の考えを見つめ直すのではなく、安易にまわりの意見を受け入れたり、それ以降かかわろうとしなかったりしていることにつながっていた。このままでは、仲間の考えの背景まで探ることができないで仲間とかかわり続け、さらに自分の考えを深めることができないと考えた。

お客さんや店員さんから話しかけられると、受け答えするから物怖じしない子なんだろうなと感じている。(7月13日 懇談会で母親の話)

良樹は、休日に母親のお店で過ごすこともある。そのようなときは、お客さんや店員さんとかかわることができることが母親からの話で見えてきた。1学期の社会科の授業で、学校周辺で知っていることを出し合っていた

とき、仲間から桜城橋でお店屋さんをやったことが話題になった。その際、「いいな。やりたい」という声が出ていたが、そのうちの一人が良樹であった。良樹にとっては、級友とのかかわりだけでなく、様々な人とかかわりながら活動することに魅力を感じていることが見えてきた。

廊下に家康検定の案内ポスターが貼られているのを見て言いに来た。「去年も受けたし、今年も絶対受ける」と意気込んでいた。武将は誰が好きなのかを尋ねると、「いっぱいいるけどやっぱり岡崎出身の家康かな」と答えていた。

(6月30日 教師メモ)

良樹は歴史が好きで、岡崎市出身の徳川家康のことが特に好きで、毎年家康検定も受けているとのことだった。きっかけは、武将のまんがであったが、そこから岡崎市出身の家康に興味をもったようである。地域にかかわる歴史に魅力を感じ始めている良樹に、さらに地域に溢れる魅力を気づかせることができるのではないだろうか。

以上のことから、良樹に次のような願いをかけた。

- ・自分の考えに自信をもち、仲間とかかわりながら活動を進めてほしい。
- ・活動を進めるなかで、自分と仲間の考えがずれたとき安易に同調したり、否定したりするのではなく、どうしてそう考えたのか、仲間の考えの背景に目を向けていけるようになってほしい。
- ・思いや願いの実現のために、どのような方法に進んでいくべきか、仲間の考えにある背景までも理解しながら、自分の考えを見つめ直し、自己決定して行ってほしい。

2 教材を選定する

子どもたちへの願いを具現するため、岡崎城の城下町として栄えてきた康生通りを舞台に、様々な立場の人とかかわりながら、自分の考えを伝えられる場ができないかと考えた。そのなかで、康生通り商店街にある店舗の軒先を活用して、お店を開くことができる取り組みを知り、軒先マーケットと称して、商店街を盛り上げる案が浮かんできた。店舗の

方々にとっても商店街の活性化は、喫緊の課題としてあり、子どもたちの思いや願いとマッチしていることであった。

数店舗の軒先を使わせてもらうことで、グループ活動を取り入れることができるため、企画から運営まで仲間と考えながら取り組むことができると考えた。また、役割分担するときなど、自分だけの考えではなく、仲間の考えも聞きながら活動していく必要性も出てくる。自分の視点からだけでなく、お店の人やお客さんなど、様々な視点から考える必要性もあるため、自分の活動を見つめ直し、判断していく機会が生まれるだろう。そして、お店にお客さんが来てくれたり、お店の方が喜んでくれたりしたことを直接経験することができ、達成感を得られやすいため、教科・領域特有の資質・能力や非認知的能力の高まりを実感しやすいと考えた。

以上のことから、「康生通り商店街の軒先マーケット」を教材に選定し、次のように目指す資質・能力を設定した。

仲間と軒先マーケットを開くなかで、お店や地域の人、お客さんなど、視点の違いから軒先の活動での考えがずれたり、活動の方向性が見えずに停滞したりしたときに、仲間の考えの背景に目を向けながら、自分の考えを見つめ直し、自己決定できる。

(教科・領域特有の資質・能力)

様々な立場の人とかかわる活動を繰り返すなかで、仲間の考えを共感的に受け止めながらも、自信をもって自分の考えを伝えることができる。

(非認知的能力)

V 活動の実際

1 思いや願いをもつ場面

社会科の授業で町探検を繰り返すなかで、康生通り商店街の軒先でお店を開くことができることを知った子どもたち。そのことを紹介してくれた洋菓子店のベルンさんや、事業を取りまとめている市川さんから、これまでの軒先の活用方法について教えてもらうとともに、小学生のアイデアと一緒に商店街を盛

り上げないかと提案を受けた。自分たちでお店屋さんを開くことに興味をもっていた子どもたちは、自分たちもやりたいと意欲を高めていた。恵理は、ベルンさんで出た油を使って石けん作りを体験できるようにしたらどうかと構想し、慎太郎は、1学期の喜劇の経験から出し物をして楽しんでもらおうとするなど、さっそく具体的な内容を考え出す子どもも現れた。一方、自分たちで本当にできるのかと心配に感じる静香や、計画することの多さからみんなで協力しなければいけないと考える和美の姿もあった。意欲の高まりだけでなく、切実感をもつためには、康生通り商店街の現状を知ることや、康生通りに愛着をもつことが必要と考え、康生通り商店街にあるお店にインタビューしたり、自分たちのアイデアを聞いてもらったりするなど、直接ふれ合う時間を設けた。その結果、親切に対応してくれるお店ばかりで、康生通りの人の温かさに魅力を感じる彩美や、100年以上続くお店が多くあることに驚き、商店街の歴史に魅力を感じる浩志など、康生通りの人の温かさや歴史にふれ、岡崎市にとって大切な場所であるという思いを高めていった。

良樹は、母親の買い物に付き添った経験から、数店舗については知っていたが、実際にインタビューをしたことで、昔の康生通りのことやお店の人たちの商店街への思いなど、今まで知らなかったことに気づき、康生通りに魅力を感じていた。また、昔の人通りとの差から、もっと人が来てほしいという願いを多くのお店が持っていることに気づき、歴史のある商店街をこれからも残すために、助けてあげたいと積極性をはたらかせながら、軒先マーケットへの意欲を高めていた。積極性をはたらかせている今なら、市川さんやベルンさんから話を聞いて、軒先でお店を出したいという思いと、町探検の経験から、康生通り商店街の魅力や足りなさに気づき、商店街をなんとかしたいという思いをかかわらせる

ことで、自分たちの軒先マーケットで康生通り商店街を盛り上げたいという思いや願いを明確にできるだろうと考え、思いや願いを確かめ合うかかわり合いを設定した。

龍之介31 軒先マーケットをやりたいけど、90%やりたいけど、あと10%は不安。
 京成 32 なんで不安？
 龍之介33 ほんとに売れるのかなって。
 良樹 34 あーそれはわかる。やりたい気持ちはあるけどね。
 -〈略〉-
 T 59 今こうやって言っているんだけど、どうして軒先マーケットやりたいの？
 良樹 60 僕は、康生通りに人が増えると、岡崎市で家康公が生まれたということを知らない人たちにわかってもらえるかもしれないから。
 T 61 続けてどうですか。
 隆浩 62 僕は、お店の前でやってお店のものを買ってほしい。
 良樹 63 そうそう。そのための誘導って言ったら、誘導だと思う。
 T 64 お店を盛り上げたいってこと？
 良樹 65 私はそう思う。
 (10月27日 思いや願いを確かめ合うかかわり合い授業記録)

康生通り商店街への思いはいっぱいあるから、マーケットを開いても友じょうがきちんとしていたら、せいこうすると思います。
 (10月27日 学習の記録)

かかわり合いのなかで、良樹は、龍之介の「やりたい気持ち」に同感しながらも、その理由が「家康公」や「お店」など、「いっぱい」に感じていることがわかった。このままでは思いや願いが明確にならないと感じたため、対話して整理することとした。

T なんて盛り上げたいの？
 良樹 話し合ったときも言ったけど、家康公を知ってもらいたいし、旭軒に人がたくさん来てくれたらなって思って。
 T そうなんだね。家康のこと好きだもんね。家康と康生通りって関係あるの？
 良樹 康生通りって名前は、家康が生まれたって意味だし、岡崎城の城下町だから。だから、昔からある通りってこと。
 T 昔からあるんだね。昔からあるから盛り上げたいの？
 良樹 昔からずっとあるから、大切にしなきゃいけないし、旭軒の女将さんがもっと人通りが増えるといいなって言ってて、自

分たちで考えてやって！ってやらせてくれてるから、がんばりたいと思って。
 T 昔からある康生通りを大切に、人通りを増やしてあげたいんだね。

良樹 うん。

(10月31日 対話記録)

対話のなかで良樹は、「昔からある通り」であることを大切に考え、「やらせてくれる」と、旭軒さんの人通りが増えてほしいという思いに応えたいと考えていることがわかった。対話によって、旭軒さんの思いを大切にしながら、歴史ある康生通り商店街を盛り上げたいという良樹の思いや願いを明らかにすることができた。

2 活動を見直す場面

思いや願いを確かめ合った子どもたちは、1回目の軒先マーケットに向けて、グループで準備に取り組んだ。良樹は、旭軒さんの前で1000円以上の商品を購入した人にくじ引きができるように計画を立てていた。それは、お店の商品を買ってもらうことに価値を感じていたからであった。そして、1回目の軒先マーケットを開いた。

のきさきマーケットをやったことは、しょうばいはむずかしい。なぜなら、さいしょの20~30分はお客さんがきたことにはきたけど、1000円いじょう買ってくれなかったから。でも、せっきょくてきにいろいろなところに話していったら、じょじょにふえていった。

(11月6日 学習記録)

良樹は、初めての商売に対し、「むずかし」さを感じていた。しかし、「せっきょくてき」と前向きに取り組む



軒先で呼びかける様子

むことができている。1時間ほどの間に実際に来たお客さんは8名で、あまり盛り上げることはできなかったと感じていたため、改めて2回目の軒先マーケットを開催することとなった。良樹たちは、くじ引きの景品を増や

して、水引きや染め物など、和菓子に合うものを考えて手作りしていた。

(2回目は) 前とちがって、さいしょも人がきて、と中10分くらいめっちゃめっちゃ人がきて、20人くらいきたと思います。—(略)—1つのお店だとこうせいどおりをもらあげたことにはならないから、あさひけんからマルショウまで人がいくと、ほんとうに人どおりがふえたことになる。
(11月13日 学習記録)

1回目も2回目もお客さんが旭軒さんに来てくれたことに喜ぶ姿を見せた良樹であったが、自分の場所だけでなく、「こうせいどおり」全体のことを考えていることがわかった。また、良樹はまだ人通りが増えていないと感じており、康生通り商店街を盛り上げるには、もっと人通りを増やすことが必要であると、考えていることがわかった。そのために、3回目には軒先を紹介し合ったり、呼び込みを積極的に行ったりするべきと考えていた。しかし、同じグループの文人は、旭軒さんにもっと人が入ってもらって人気店になることで、まわりのお店についでに寄ってもらうことが大切だと考えていた。他の軒先もがんばってお店を人気店にすることで、商店街の活性化につながると考えていることがわかった。両者とも康生通り商店街を盛り上げたいという思いや願いをもち、人通りを増やしてお店の認知度を上げたいと考えていた。二人に限らず、籠田公園の近くのマルショウさんで軒先を開いていた知明も、自分たちが籠田公園にいる人たちに声をかけ、商店街をまわってもらうことで盛り上げられると考えていた。活動を繰り返したことで自分の考えに自信をもっている今なら、同じ思いや願いのなかで、考えのずれをかかわらせながら、活動の方向性を自己決定して進めていけるだろうと考え、活動を見直すかかわり合いを設定した。

文人60 (旭軒を)人気店にすれば、なんか人がいっぱい来てくれるから。それで人気なる。
T 61 旭軒が人気店になればどうなるの？
文人62 旭軒元直のお菓子を買いに人が集まっ

和美63 てにぎやかになる。
でもさ、1店舗だけじゃなくて、もっといろんなお店が盛り上がったほうがいいんじゃないの。
良樹64 私と同様だ。私と同様の方がいた。
道宏65 暴れん坊チキンがあるよ。そこだけ人気店になっている。
—(略)—
良樹95 僕はまあどっちかというとき和美さんとかのほうで、なぜかっていうと、例えば、自分も旭軒なんだけど、旭軒だけが人気になってても、それは、目標の康生通りじゃないから。
T 96 良樹さんとしては、1店舗だけじゃなくて、康生通り全体がどうなってほしいってこと？
良樹97 1店舗だけでも、決して康生通りじゃないから、目標は、旭軒を盛り上げようじゃなくて、康生通りを盛り上げようだから。
—(略)—
莉子148 お店の中に入ってほしいからスタンプラリーを作って、お店の中に置いて、お客さんもお店の中に入って、これいいなって思うかもしれないから。中に置いたら、商品を見ながらやってくれる。
良樹149 確かに。だって、盛り上げるべきは、その我々のお店ではなく、そのお店だもん。
(11月17日 活動を見直すかかわり合い授業記録)

りこさんのスタンプラリーがいいといういけんにさんせい。あさひけんからみどりやへ行ったりすると、それこそ、人通りがふえるんだと思います。あとはどれくらいさんせいしてくれるか。できるならやりたいです。
(11月17日 学習記録)

かかわりのなかで、良樹は、和美の考えに対して「同様」と共感を示していることがわかった。さらに話し合いが進むなかで、「どっちかというとき」と、文人の考えに対しても理解を示しながら、自分の考えをはっきりと伝えていることがわかった。そして、莉子が提案したスタンプラリーの考えに対し、「確かに」と納得し、盛り上げるべきは軒先ではなく「そのお店」であると発言したのである。その日の振り返りには、莉子の考えに「さんせい」し、「あとは」と、今後の活動の見通しをもっていることがわかった。良樹は、自分の考えに自信をもちながらも共感性をはた

らかせて、康生通り全体の人通りを増やしな
がら、お店に入ってもらって人気店にでき
ると、莉子のスタンプラリーの考えを取り入れ
ようと自己決定していったのである。

3 活動を振り返る場面

3回目の軒先マーケットを終えて、軒先に
100人以上来たことや、お店の商品を実際に
買ってくれたことで、子どもたちは、自分た
ちの活動に価値を感じ、大成功だったと振り
返った。さらに、市川さんやお店の人たちか
ら、これまでの軒先マーケットが商店街やお
店のためになったと感謝された。そのこと
により、子どもたちは、康生通り商店街を盛り
上げることができたと自分たちの活動に満足
感を得ることができた。良樹もまた、今ま
での数倍のお客さんが来たことを喜び、旭軒
さんで買い物をする人が多くいたことで、自分
たちの思いや願いを実現できたと実感するこ
とができた。これまでの活動に満足している
今なら、単元を振り返るなかで、自分の成長
を実感できると考え、振り返り作文を書く時
間を設定した。

のきさきマーケットをやってよかったことは、
3回目にスタンプラリーをしてみたら、ふぞ
くっこどころか、いっぱいのお客さんも笑顔に
なっていて、人通りはふえて、せいこうだ
ったと思います。－(略)－自分のせいちょう
したのは、ことばづかいだと思います。せ
っきやくやこうしょうはことばを使っ
てするものだからです。
(12月7日 振り返り作文)

振り返り作文によかったこととして、笑顔
にできたことや人通りが増えたことをあげて
いることから、目標にしていたことを達成
でき、満足している様子がわかった。また、
「せっきやくやこうしょう」といろいろな人
とかかわったことで、自分のことば遣いが
変わったことに成長を感じているのがわか
った。これまでの活動を振り返り、自分の
成長を感じている今なら、お客さんや
お店の人を笑顔にできたことや、人
通りを増やせた理由をはっきりさせる
ことで、教科・領域特有の資

質・能力や非認知的能力の高まりを実感
できると考え、対話することとした。

T 軒先マーケットでよかったことで、人通
りを増やせてよかったってあるけど、何
がよかったんだろう。
良樹 スタンプラリー。
T スタンプラリーなんだね。それはよい
なって思ったんだね。
良樹 そう。前話し合いのときに莉子さんが
言っていたとき、おもしろいなと思って。
3年3学級の軒先がつながって、お客
さんも笑顔だったし、よかったなって。
T おもしろいってどういうこと？
良樹 お店のためにもなるし、スタンプラ
リーだと軒先もまわるから人通りが増
えるかなって。
－(略)－
T 自分の成長は、人との接し方って書い
てあるけど、どうしてそうなったと思
う？
良樹 やっぱ、この人接し方がうまいな
ってならないと、お客さんにお店が
気に入ってもらえないから。

(12月11日 対話記録)

対話のなかで良樹は、3回目の軒先マ
ーケットで成功だった理由を莉子のスタ
ンプラリーという考えを受け入れて考え
をまとめられたことや、お客さんやお
店の人と接することで、その人たちの
思いを想像しながら行動するようにな
ったと、人の接し方に成長したことを
挙げていた。活動を振り返るかわり
合いでは、知明が人前が苦手な凌成
に対し、軒先の活動では自ら呼びか
けていて成長していると仲間の成長を
紹介したり、普段大きな声でしゃべ
ることが苦手な莉子は、話し合いで
自分の考えを認められたことで自信
をもって発言できるようになったと、
自分自身の成長を振り返ったりして
いた。残念ながら、良樹はこの日は
欠席することとなったが、後日
みんなの話し合いの様子を板書で
見せたり、話したりしたところ、
自分と同じように目標を達成でき
たことに喜ぶ仲間がいたことによ
さを感じていた。そして、軒先マ
ーケットをやってよかったと、
振り返ったのである。

VI 成果と課題

良樹は、自分のことを素直に表現できるが、まわりからどう思われているかを意識しすぎるために、安易に同調してしまうことがあった。そんな良樹が、かかわり合いにおいて、文人の軒先マーケットでお店を人気店にするべきという考えに対し、自分の考えと違っていても安易に同調するのではなく、自分の考えも主張しながら、文人や莉子の考えを受け入れていく姿を見せた。これは、良樹が自分の考えに自信をもちつつも、共感性をはたらかせながら仲間の考えを受け止めて自己決定し、今後の活動に見通しをもっていく姿であったと考えている。そこには、仲間がどうしてそう考えるのか、軒先マーケットへのかかわり方を理解したことで、自分の考えを見つめ直すことができたのだと考えている。これは、教科・領域特有の資質・能力を高めるために、良樹を非認知的能力という視点でとらえ、非認知的能力がはたらくように、朱記や対話で考えをはっきりさせたり、支えたりしながら、かかわり合いを設定したことが、有効であったといえる。

本実践では、地域とのかかわりをもつために、時間の確保に十分ではなかった部分があった。例えば、軒先マーケットを実施する回数は、お店の都合もあったため、全てが子どもの意向に沿って実施できたわけではなかったことがあげられる。このように、地域と学習することに学ぶことは多いが、授業時間数を考慮しつつ、単元を構想する必要があるだろう。

注

- 1) 本稿における児童の個人名は、すべて仮名である。

参考文献

- ・愛知教育大学附属岡崎小学校 (2023) 『自己の成長を自覚する子ども』、明治図書

- ・大槻真哉 (代表) (2023) 「豊かに生きる」生活教育研究紀要第74号、愛知教育大学附属岡崎小学校